NO.をクリック

平成30年度　実践研究奨励援助事業　採用校・研究主題等一覧

■　学校経営研究部門

No.	学　　校　　名	校長名	研究者代表	研　　究　　主　　題
	【小学校】			
<01>	宇都宮市立清原東小学校	久保井　規文		夢のかけ橋プロジェクト(ふれあいによる自己の生き方の探究)
<02>	鹿沼市立石川小学校	野原　　裕		「自分を表現できる児童を育てる指導の工夫」を通した教職員の資質向上と、働きがいのある同僚性の高い学校づくり
<03>	鹿沼市立南押原小学校	湯澤　晴美		学力向上を目指した学校体制での組織的・継続的な取り組み
<04>	市貝町立市貝小学校	髙木　　達		地域と学校が共に手を取り子どもを育てる、魅力的な学校づくり ～社会に開かれた教育課程の実現を目指して～
<05>	壬生町立壬生東小学校	増渕　直樹		自ら考え表現し、学び合う子供の育成 ～主体的に表現し合う子供の育成を目指す授業の改善～
<06>	下野市立細谷小学校	須藤　克己 蓬田　みどり		小規模校のよさを生かした学力向上への取り組み ー児童が学びの手応えを実感できる主体的・対話的で深い学びー
<07>	佐野市立出流原小学校	谷　　直人		「一人一人を生かし伸ばす教育活動の実践」 ～インクルーシブ教育推進の視点からのアプローチ～
<08>	足利市立青葉小学校	松村　由紀 竹内　悦朗		特別な支援が必要な児童への早期支援システムの構築
<09>	足利市立名草小学校	小堀　康弘		郷土や学校の伝統・文化を生かし、児童や地域の実態を踏まえた特色ある学校づくり ～「残す教育」（地域のよさを知り地域を愛する子供を育てる）「出す教育」（地域を離れても堂々とやっていける子供を育てる）～
	【中学校】			
<10>	宇都宮市立古里中学校	中村　靖之		いじめゼロ運動を核とした，地域学校園における人権教育の推進 ～よりよい人間関係を築くために，人の気持ちを考えられる生徒の育成を目指して～
<11>	下野市立南河内第二中学校	阿嶋　敬一		これからの社会を生き抜くための確かな学力を育む授業力の向上 ～新学習指導要領の趣旨を踏まえた数理教育における主体的・対話的で深い学びの創造～
	【高等学校】			
<12>	県立宇都宮女子高等学校	宇梶　宏美		新学習指導要領、新大学入試制度を見据えた探究活動の充実とデジタルポートフォリオの活用に関する研究
<13>	県立鹿沼東高等学校	梅澤　希人		学校の特色づくり（英語力の向上・ＡＬ推進）のための全校体制構築
<14>	県立茂木高等学校	大山　　優		地域理解学習の充実により地域発展に貢献できる人材の育成を図る
<15>	県立大田原女子高等学校	青木　茂実		地域の期待に応える魅力と活力ある学校づくり ～グローバル化や急激な社会変化に対応できる女性リーダー育成のためのキャリア教育～
	【特別支援学校】			
<16>	県立のざわ特別支援学校	久保田　幹雄		自立活動の指導における校内資料「姿勢・動き」のよりよい活用について

戻る

学校経営研究　〈01〉

研究主題　夢のかけ橋プロジェクト（ふれあいによる自己の生き方の探究）

学校名　　宇都宮市立清原東小学校

校　長　　久保井　規文

１　研究目的

清原地域学校園では，「自己を見つめ，自己のよさを生かした夢の実現」に向けて主体的に取り組む児童・生徒の育成に力を入れている。本校でも児童が，将来社会において自立的に生きる基礎を培うために，学びの連続性を確保し，活気に満ちた学校づくりを目指している。また，特色ある学校づくりとして，地域の「人」「自然」「文化」とのふれあいを通して，児童一人一人が自己の生き方を考え，将来への夢をもつとともに，社会で自立的に生きるための能力の育成に取り組んできた。この活動を更に充実させることで児童が夢を持って将来を見つめ，自立的に生きる基礎を培えるのではないかと考えた。

２　研究内容

(1)ふれあい発見ラリーの実施に向けて

・地域企業への協力要請と確認

・発見ラリーの効果的な運営方法の検討

・発見ラリーの実施と振り返り

【宇都宮市東消防署清原分署のブース】

(2)二分の一成人式の実施

・「いのちの授業」講師依頼

・将来の夢と感謝の言葉原稿作成

・二分の一成人式の実施と振り返り

(3)夢実現教室の実施

・講師の確認と協力依頼

・準備物の確認と不足分補充

・活動計画表に基づく実施と振り返り

【テレビ・ラジオの制作のブース】

３　研究成果

・これまで児童が地域に出向く形で実施していた「氷室ふれあい発見ラリー」を，今年度は地域の企業や事業者に学校に来ていただくようにした。時間を有効に活用でき，余裕のある活動になった。また，オープンスクールを合わせて実施したことで，本校の特色であるこの取り組みを多くの保護者に知ってもらう機会となった。

・様々な分野の専門家をお呼びして講話をいただく「夢実現教室」は，小学校を卒業し新しい未来へと進んでいく６年生にとって，職業観を育てることに加えて，将来，社会で自立して生きていく基礎を培う一助となった。

４　今後の課題

・将来，社会で自立的に生きるための能力を育てるには，将来について考える機会を数多く与えることが大切であるということが実証されたので，今後もこれらの活動を継続するとともに，より有効な手法・手立てを講じて充実を図りたい。

戻る

学校経営研究〈02〉

研究主題　「自分を表現できる児童を育てる指導の工夫」を通した教職員の資質向上と、働きがいのある同僚性の高い学校づくり」

学校名　　鹿沼市立石川小学校

校　長　　野原　　裕

１ 研究目的

・各教科の「話し合い活動による主体的な学び合い」を通して「友達との協働や関わり合いを通じて、自らの思いや考えを豊かな表現で伝えられるようにすること」を目指す（児童）
・「自らの思いや考えを豊かな表現で伝えられる児童を育てる指導の工夫」を研究する（教職員）
・研究を通して教職員の資質、同僚性を高める（教職員）

２ 研究内容

１）授業改善の具体策を検討する（現職教育や学担会）
- 基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を目指すための工夫について
- 昨年の学力改善レポートや今年度の学力向上プランをもとにした、発達段階に応じた主体的･対話的で深い学びの実現に向けた工夫について
- QUの結果を生かした授業づくりについて

《本校の考える基礎となる力》

【考える力】
◎読解力
- 理解する力
- 想像する力

【表現できる力】
◎対話力
- 話す力
- 書く力

【学び合う力】
◎傾聴力
- 比較する力
- 判断する力

２）「主体的な学びスキルの構造図」を活用した系統的指導の確立
３）指導主事（学力向上指導）との連携を図る（教科指導について・9月19日）
４）指導案検討会を行う（9月26日）
５）指導主事（教科指導）との連携を図る（指導案検討・10月3日）
６）研究授業・授業検討会を行う(10月16日)
７）６）を参考に、各担任が実践を行い、校内研究授業で確認し合う。（11月、1月）
８）研究の成果と次年度への改善策の検討を行う（1月）
９）研究のまとめ作成（2月）
10）PDCAを生かした平成31年度の活動開始（4月）
11）平成31年度の研究授業（5月、6月）
12）研究終了（7月）

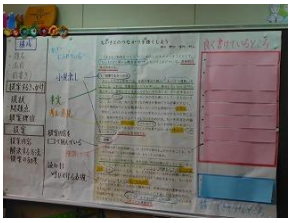
３　研究成果

児童

・各教科の「話し合い活動による主体的な学び合い」が行われる機会が増え、児童一人一人の学習に向かう（取り組む）意欲の向上がみられた。
・「友達との協働や関わり合いを通じて、自らの思いや考えを豊かな表現で伝えられるようにすること」を通して学級集団作り、学び合いや高め合いが促進され、知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力をはぐくむことにつながった。

【研究授業風景】
（１０月）

【表現できる力】
対話力：話す力、書く力の育成の展開



教職員

・研究を通して新指導要領改定の基本的な考え方や児童に身につけさせるべき内容の共通理解を図ることができた。
・研究を通して教職員の資質、同僚性を高めることができた。
・研究を通して、学習指導主任を中心としたミドルリーダーの育成につながった。

４　今後の課題

・わかる授業、話し合い（学び合い）活動を通した主体的な学びを目指すために、ICT機器の不足が問題となった。今後、①活用事例等の収集・研究、②大型提示装置、実物投影機の整備、③有線LANの環境整備の充実と④教職員の実践研修・モラル研修、⑤児童への使用上の注意点、モラル指導等に取り組んでいきたい。

戻る

学校経営研究〈03〉

研究主題　学力向上を目指した学校体制での組織的・継続的な取り組み

学校名　　鹿沼市立南押原小学校

校　長　　湯澤　晴美

１　研究目的

本校は、個に寄り添った指導を心がけ、学習支援や小集団での補助的支援等により学力補充に努めている。しかし、学校全体での学力の定着が十分ではない。そこで、全ての児童の学力向上を目指し、学校全体で組織的・継続的な取組が必要であると考え、この研究主題を設定し、取り組むこととした。

２　研究内容

（１）基礎的・基本的な知識や技能の習得

① 基本的な生活習慣や学習習慣の確立

・「よい子の生活」の継続指導

・聞き方・話し方の継続指導

・学級経営・学びに向かう集団作り

・家庭学習の充実（強調週間の活用）

② 基礎学力の定着（朝の学習の活用）

・各種調査結果の分析・考察

・プリント学習・スキル学習

・読書・読み聞かせ

・ＭＩＭ活用による読みの指導

（２）教員の指導力の向上

① 学校課題の推進による授業改善

・研究授業及び授業研究会の実施

・要請訪問や各種訪問事業の活用

② 学び合いを高める授業実践

・理論研究・各種研修会等への参加

・学び合いのレベル作成と活用

③ 学力向上に関する研修

・学力アッププロジェクトの活用

・学力向上改善プランの作成と活用

（３）個に応じた指導体制の整備と学力補充

① 朝の学習を活用した補助的支援

・アセスメントによる実態把握

・スマイル学習（小集団での指導）

② 一人一人のニーズに応じた指導・支援

・個別の指導計画の評価・見直し

・個別の教育支援計画の活用

・教員の複数配置による学習支援

３　研究成果

・教職員の経営参画意識を高めながら、同僚性の構築と指導力の向上を図れた。

・学業指導が充実し、意欲的に学びに向かう姿勢が身についてきた。

・朝の学習の有効活用が図れた。

・家庭学習の習慣が身についてきた。

・授業改善に向けて全校体制で取り組み、授業研究会が充実してきた。

・個に応じた指導体制整備に取り組めた。

・教師の学力向上を意識した取組が、児童の変容へとつながってきた。

４　今後の課題

・学力向上を目指してきたが、学力調査の結果を見ると成果が不十分である。今後も組織的・継続的に取り組む必要がある。

・学力向上には指導力向上が重要である。学校課題を推進し、授業改善に努める。

・一人一人の教育的ニーズに応じた指導・支援に向けて、指導者の確保が困難である。指導体制の工夫・改善が必要である。

戻る

学校経営研究〈04〉

研究主題　地域と学校が共に手を取り子どもを育てる、魅力的な学校づくり

～社会に開かれた教育課程の実現を目指して～

学校名　　市貝町立市貝小学校

校　長　　高木　　達

1　研究目的

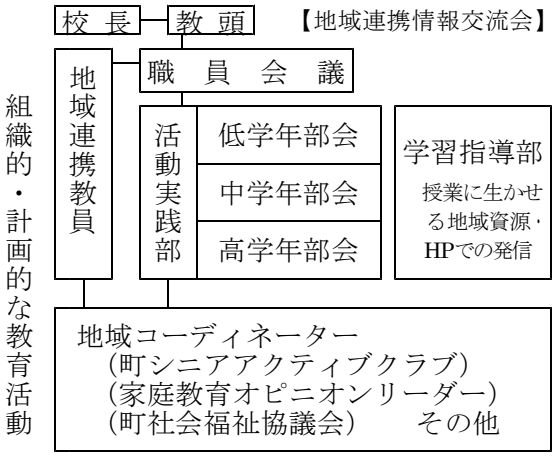
地域連携推進モデル校としての取組の継続と向上を目指し、保護者・地域・関係諸機関とのより一層の連携・協働の在り方を追求するため

【地域連携情報交流会】

2　研究内容

(1) 地域連携推進体制

ア、校内体制と組織



イ、地域連携情報交流会の定期開催

（7月・９月・2月）

学校のニーズと地域コーディネーターの方々の考えを交換し合い、より効果的な関わり方を検討する。作成した「地域人材連携授業一覧表」を元に、今後の活動内容や必要人数等の見通しを立てて、支援の仕方を確認する。さらに細かい打合せが必要な場合は実践部の学年担当と話し合う。

(2) 活動の実際　　※VT＝ボランティア

・今日までの地域連携実践の洗い出し、継続的な取組と計画作成・学校評価による検証
・水泳指導（水泳インストラクター VT）
・ＰＴＡ総務部会議・ＰＴＡ親子奉仕作業
・習熟度別支援タイム（学習支援 VT）
・自由参加日・ミニ学習発表会
　（各教科等学習支援 VT・読み聞かせ VT）
・運動会協力　（保護者 VT）
・学力向上研究授業（学習支援 VT）
・学校保健委員会　（学校三師との連携）
・生活科・総合的な学習の時間
　家庭科「ミシンの使い方」・社会科「戦争体験の話」・校外学習（引率 VT）
　生活科「しもつかれ作り」（地域 VT）
　総合「味噌作り」（地域 VT）
　総合「地産地消～フランス料理作り」
　（地域人材活用）
・田植え・稲刈り体験（地域人材活用）
・ふるさと宿泊学習　（宿泊見守り VT）
・交流給食（地産地消・農家の方々と給食）
・親子教育講演会・道徳授業公開
・校内教職員研修　（SC、SSWR との連携）
・夏休み楽習会（地域人材による宿題指導）
・登下校安全指導（スクールガード VT）
・地域行事への参加
　（夏祭り、節分祭、町音楽祭等の参加協力）

【郷土料理しもつかれ作り】　【地産地消交流給食】

3　研究成果

○様々な体験活動や教育活動に多面的な角度から、外部人材の支援を受けることで、児童だけでなく教職員の視野も広がった。
○社会に開かれた教育課程を目指し、教育活動に大いに保護者や地域人材の協力、連携を要請することに対して、教職員の抵抗感や負担感が軽減してきた。
○担当者だけの繋がりではなく、学校と地域団体という組織的な連携により、教職員の異動や担当者の変更があっても、地域コーディネーター役が中心となり、継続的に連携・協力の体制が構築されてきた。
○地域の子供達を、多くの大人が関わり、協力して育てていこうとする保護者、地域の連帯意識が高まりつつある。
○学校ＨＰや学校だよりに活動の様子を配信することで、学校目標の具現化や教育活動への協力に、地域の関心が高まってきた。その他でのコミュニケーションも円滑に進められるなど、よい影響が波及した。

4　今後の課題

・外部人材との連携については、効果的に進めるためには綿密な調整や打合せが必要となる。時間の工面に工夫が要る。
・学校からの発信や要請は進められたが、地域や保護者からの発信については未だ不十分であり、一方的な働きかけであることも多かった。互いに充実感やメリットを実感できる連携を模索したい。
・保険代等、継続的な予算確保も課題である。

戻る

学校経営研究〈05〉

研究主題　自ら考え表現し、学び合う子供の育成
～ 主体的に表現し合う子供の育成を目指す授業の改善 ～

学校名　壬生町立壬生東小学校

校　長　増渕　直樹

代表研究者　教諭　武田　和代

１ 研究目的

児童一人一人による課題意識を明確にし、継続して表現し合う場の確保や支援の工夫を主とした「授業の改善」の研究を行うことによって、主体的に考え表現し、学び合う子供を育てる。

２ 研究内容

（１） 研究主題に基づいた具体的取組

算数科・国語科・外国語活動の授業を通して、以下の７つの具体的項目を設定した。

① 本時の狙いを明確にした授業
② 「とちぎの子どもの基礎・基本」を重視した授業
③ 単元構成、指導形態（習熟度別学習など）の工夫
④ 教科書を基本とした授業における「発問」の工夫
⑤ 自分の考えを書いたり共有したりする場面の適切な設定
⑥ 児童による適切な表現方法の工夫（ノート指導など）
⑦ 主体的に取り組むことができる課題設定の工夫

公開研究授業として、３授業を提案した。

① 6 月 20 日（水）4 年算数習熟度別授業
②10 月 30 日（火）1 年人権に関する授業
③11 月 17 日（金）5 年外国語活動授業

この他、すべての学級担任が、校内研究授業として、「1 人 1 研究授業」を行った。

（２） 児童の希望に基づいた個別指導

朝のドリルタイムの時間を活用し、国語科・算数科の個別学習を必要としている児童を選出し、個別指導を行った。

３　研究成果

（１）算数習熟度別学習の成果

2 学期より習熟度別 3 コース学習にした 5 年生は、1 月に行った学力調査において、全国平均を１０ポイント以上、上回る正答率を得た。

（２）職員研修での成果

研究主題の７つの具体的項目ごとに、成果と課題を振り返る研修を行った。研修によって、授業における「発問」「指示」などの効果的な在り方についてお互いに考えることができた。

４　今後の課題

① 算数習熟度学習を、さらに効果的に運用するシステム作り。
② 「授業改善」に向けての「指示」「発問」。

戻る

学校経営研究〈06〉

研究主題　小規模校のよさを生かした学力向上への取り組み
－　児童が学びの手応えを実感できる主体的・対話的で深い学び　－

学校名　　下野市立細谷小学校
校　長　　須藤　克己（H30）　蓬田　みどり（H31）
研究者　　教頭　坂本　美保　他

１　研究目的

小規模特認校である本校は、１学級の人数が少ないため、目が行き届ききめ細かな指導のできる環境である。さらに一人一人の学習状況や達成状況の分析を生かし、学習内容の系統性を全職員で理解しながら、指導に役立て、学力向上に努める。また、学びの手応えを実感できる授業づくりを研究する。

２　研究内容

（1）各種調査結果の分析

とちぎっ子学習状況調査・全国学力学習状況調査の質問紙調査より、子どもの学ぶ意欲・学習習慣について分析する。各学年とも少人数ながら、学習習慣、意欲にも個人差が大きいため、個々の学習状況や学習意欲を把握し、個別の課題に取り組ませたり、取組を認め励ましたりして、意欲づけを図る。

全校一斉計算力テスト（9月・1月）、ＴＯＩＴ検査（宇大教職大学院原田研究室作成・石橋中学校区小中一貫教育の試みの一つ）を実施し、個々に学習内容を補充指導する。

（2）指導力向上のための取組

研究教科を算数とし、授業改善の視点を絞って取り組む。学習内容の系統性、単元計画を理解し、本時のめあてを共有し、振り返る活動をイメージした見通しをもった指導計画をたてる。

興味関心を高める「課題設定」とともに「提示」の工夫、学びの手応えを得られる「発問」について研究する。また、ＩＣＴ機器を活用し、表現力をのばすとともに、分かりやすい授業づくりに生かす。

「ぐんぐんタイム」（業間 15 分・年間 20 回）で様々な発展問題に取り組んだり、既習事項の定着を図ったりして、自主学習につながる時間として活用する。

（3）保護者への働きかけ

家庭学習強調週間（ぐんぐんウィーク）を年間３回設定し、家庭ごとに学習や生活のめあてを設定して実践する。

連絡帳や自主学習ノートのコメントなどで、児童のがんばりを認め励ますかかわりをしていく。

３　研究成果

個々の学習状況や達成状況の分析を生かし、個別の課題に取り組ませたり、励ましたりすることを通して、意欲づけを図ることができた。意識調査でも「自分のために、または自分から学習する大切さ」を理解する児童が学年が上がるにつれ多くなっている。また、研究教科の算数では、児童主体の課題解決型の授業実践に取り組み、達成感を味わわせることを目指した結果、算数が楽しいと感じる児童が増えた。家庭の協力を得て、メディアコントロールができ、学習意欲を高められた。

４　今後の課題

個々の児童に目を向けることに相まって、「学びの手応え」のとらえ方が幅広くなる。新学習指導要領の完全実施に合わせ、全職員で、目指す学びの姿（どのような姿であれば、「主体的・対話的で深い学び」がなされているのか）の共通理解と、それを目指すための、より深い職員の学び合いが必要である。

戻る

学校経営研究〈07〉

研究主題　「一人一人を生かし伸ばす教育活動の実践」
～インクルーシブ教育推進の視点からのアプローチ～

学校名　　佐野市立出流原小学校

校　長　　谷　直人

１　研究目的

本校は、学校研究課題を「一人一人を生かし伸ばす教育活動の展開　～インクルーシブ教育推進の視点からのアプローチ～」と定め、自閉症・情緒障害特別支援学級及び通常の学級における『合理的配慮』を中心に実践研究を推進してきた。今までの成果として、「話合い活動」が児童の学びに効果的な影響をもたらし、それが合理的配慮として生かされるという成果を得た。また、「話合い活動」の実践には「一人一人が認められ、生かされる学級」であることが不可欠であることも分かった。これらの成果を生かし、本年度は児童の発達段階等を考慮し、学年ブロックごとに系統的に研究を進め、内容の充実を図る。

２　研究内容

組織的な研究推進のため、発達段階を考慮し、低・中・高学年ブロックごとに目標を設定し研究を進めることとした。以下に示したものが、各学年ブロックの目標と具体策である。

【低学年ブロック】

○「読む、聴く」に重点を置き、言語能力の基礎を養う。

読みに関しては、「多層指導モデルＭＩＭ（デジタル版）」を活用し、語彙力の強化を図った。また、聴き方の指導『うめラいス』を重視し、言語活動の充実、工夫、改善、検証を行った。さらに、中学年からのテーマである話合い活動の基礎を身に付けさせる。話型を中心としたスキル指導を工夫した

【中学年ブロック】

○話合い活動の工夫、改善を行う。

教科や、単元、そして一時間の授業の流れの中で、ホワイトボードを利用した「話合い活動」がどのような場面で、またどのような形態（グループの人数等）で効果的なのか研究した。また、友達の意見を踏まえて発言できるような力を身に付けさせるため「聴き合う」指導の工夫を行った。

【高学年ブロック】

○話合い活動における課題の内容及び提示方法を開発する。

主体的、対話的で深い学びの実現に向けた質が高く、児童にとって魅力的で意欲的になれる課題の在り方や、課題提示の仕方の工夫を行った。

なお、研究推進に関し、定期的に振り返る時間を設けた。また、「インクルーシブ教育の視点」からの学級経営、授業づくり等に関して、外部指導者（宇都宮大学教職大学院准教授　原田浩司先生）を招聘し指導助言を仰いだ。

３　研究成果

「話合い活動」を進めていくためには、「学び」の基本となる学級経営の充実が重要であることを再認識することができた。また、発達段階を考慮し、各学年ブロックの目標と具体策を年度当初に定めたことにより、研究内容をより焦点化することができた。また、定期的に共有化を図ったことにより、次の段階（学年ブロック）との継続性を意識することができた。

４　今後の課題

次年度以降はこれまでの成果を生かしながら「話合い活動」を含む「学び合い（深い学び）」について研究を進めていきたい。

戻る

学校経営研究〈08〉

研究主題　特別な支援が必要な児童への早期支援システムの構築
学校名　　足利市立青葉小学校
校　長　　松村由紀(2018年度)
**　　竹内悦朗(2019年度)**

1　研究目的

読み書きの力に課題がある児童が目立つという実態に基づき、全校児童を対象とし読み書きにやりにくさをもつ児童の早期発見、早期支援について、組織的支援が行えるような校内体制づくりをする。

2　研究内容

（1）全職員での共通理解

市教委指定研修会「通常の学級の特別支援教育」を多くの職員に受講する機会を促し、MIMの専門研修受講教員による伝達講習の場を設けるなどして、意義と方法について共通理解の上、学校経営の努力点として示した。

（2）読みのアセスメント MIM の導入

・継続的な読みのアセスメントを行なう。(1～3年は毎月。4～6年は初めの2回のみ。)
・全校児童を対象としたアセスメントを行い、全学級担任が、結果の確認や要支援児童の抽出や保護者との教育相談を行なう。

（3）早期支援委員会設置

＜メンバー＞

校長、教務主任(会の運営)、低学年担任(通常の学級での教材作成)、通級指導担当(個別指導での教材準備)、特支コーディネーター、学力向上担当(アセスメント結果の記録)

＜内容＞

・全児童の読みのアセスメント結果から、個別指導が必要な児童を抽出する。
・アセスメント結果を毎回記録して資料とする。
・指導法の検討（通級による指導、担任への助言、ランランタイムでの指導計画）
・教材作成と整理保管
・指導の教室の環境整備（1年学習室、2・3年学習室）

（4）指導の工夫

ア　国語でのミニ活動

・授業の導入など5分程度で楽しく取り組む活動を行なう。＜活動例＞パンとクイズ・小さい言葉リレー等

ミニ活動の手作り教材

・通級指導担当者による出前授業（1年生）

イ　ランランタイム　（小集団での個別指導）

＜対象児童＞　委員会で抽出し、保護者と本人の意志確認した児童13名　（3年5名　4年3名　5年4名　6年1名）

＜指導者＞　通級指導担当、学力向上担当、教務主任、校長・教頭　等

＜指導内容＞各児童にあった読み書きの学習

＜指導方法＞毎週水曜日の昼休み(20分間)

4グループに分けて担当し、プリントで、個別指導を行なう。個別のファイルを使って積み重ねる。ファイルは学校で管理し、次の教材を準備する。

「集中して！」4年生グループ

「リズムよく！」1年生グループ

3　研究成果

「一人一人のアセスメントに基づいた読み書きの支援」はかねてからの継続課題であったが、各職員の実践や研修の経験を生かし、組織作りを工夫しながら、全職員が一歩ずつ踏み出す具体的実践となった。特別な支援が必要であるにもかかわらず、今まで、通級指導の対象にもならず指導の手が届きにくかった児童への支援を、スタートすることができた。週1回20分の個別指導であっても、続けることで明らかに読みの力が改善された児童を確認することができた。

4　今後の課題

一人一人の実態に応じた指導を行なうには、今後の継続とさらなる指導内容の充実が課題である。ランランタイムの指導時間帯の吟味、指導者の確保、さらに保護者の理解を広げる発信をしていく努力をしていきたい。

戻る

学校経営研究〈09〉

研究主題　郷土や学校の伝統・文化を生かし、児童や地域の実態を踏まえた特色あり学校づくり
～「残す教育」（地域のよさを知り地域を愛する子供を育てる）「出す教育」（地域を離れても堂々とやっていける子供を育てる）～

学校名　　足利市立名草小学校

校　長　　小堀　康弘

１　研究目的

平成３０年度から２・３年の複式学級が始まった。児童数の減少から今後も複式学級が増える見通しである。６年前にも複式学級があったが、そのときは地域や保護者の方々からの理解を得る事が難しかったと聞いている。そこで、地域や保護者から理解や協力を得られるように３つの対策を経営方針に入れて取り組む。

① 複式学級の指導について全職員で研修を推進する。複式学級を中心に学校全体で取り組むことで地域や保護者に安心感をもってもらえるようにする。
② 平成２９年度に県大会を行った外国語活動の研究を継続し、複式学級になっても先進的な取組が継続できることを示す。
③ 地域とともに学習する活動を丁寧に進め、開かれた学校づくりを推進し、小規模校のよさを生かした地域とともに歩む学校づくりを発信する。

２　研究内容

① 外国語活動やへき地複式教育の研修を通して国や県の動向や新学習指導要領の実施に向けた動きを確認しながら、学習指導の研究を推進する。
② 小中連携や小中合同先進校視察研修を通した「学び合い学習」の実践研究を推進する。
③ 総合的な学習の時間の指導計画を見直し、地域教材を生かした学習活動を推進する。

３　研究成果

６年ぶりの複式学級復活に向け、当時の反省を踏まえ、教室環境整備や保護者啓発等を丁寧に行い、スムーズに複式学級がスタートできた。複式学級について、全教職員で研修を行うとともに、小規模校のよさを生かし、一人一人の実態を把握しながら個に応じた指導を研究・実践することで児童一人一人が主体的に学習に取り組む姿勢が育ってきた。

また、総合的な学習の時間には地域教材として、３，４年生が「名草しょうが祭り」、５，６年生が「名草ホタル祭り」を取り上げ、それぞれ学習の成果を地域のお祭りで発表するという活動を行った。子どもたちが来場した方々に自信をもって発表を行ったことは、子どもたちの自己有用感を高めるとともに地域の方々や保護者にも努力を認められ、大きな励みになった。

名草ホタル祭り

４　今後の課題

現在複式学級は３，４年生のみだが、今後複式学級が増える状況も想定しながら、小規模校のよさを生かし、地域のよさを知り、地域を愛する子供の育成を目指した学校経営を課題としてさらに研究していきたい。

戻る

学校経営研究〈10〉

研究主題　いじめゼロ運動を核とした，地域学校園における人権教育の推進
～　よりよい人間関係を築くために，
人の気持ちを考えられる生徒の育成を目指して　～

学校名　宇都宮市立古里中学校
校　長　中村　靖之

１　研究目的

変化の激しいこれからの社会を力強く生き抜くためには，生徒たちにはこれまで以上に，多様な価値観や考え方を持つ他者に対しても，豊かな人間関係を築いていくことが求められる。そこで，古里地域学校園で小中連携して実践している「いじめゼロ運動」を継続発展させることで，よりよい人間関係を築くために，人の気持ちを考えられる生徒の育成を目指し，実践的に研究を進めていくこととした。

２　研究内容

（１）地域への啓発活動（講演会の開催）

地域学校園主催とする親学講座を開催する。市教委より講師を招き，地域学校園内の小中学校のいじめゼロに向けた取組を発表し，地域の役割を具体的に検討した後，演題『いじめについて考えよう』の講話で理解を深めた。

（河内哲也様の講話）

（２）いじめ撲滅啓発活動（演劇発表）

生徒会執行部による，いじめ撲滅のための劇「ピンクのシャツのブライアン」を中学校だけでなく，学校園内の小学校でも発表し，いじめを防止する啓発活動を行った。

（古里中での劇発表）

（白沢小での発表）

（３）小中連携いじめゼロ運動

地域学校園内の小学校（２校）と連携し，標語およびポスターを作成し，３校それぞれの学校に掲示することにより，小中同一歩調でいじめゼロ運動の啓発活動を行った。

（４）小中連携あいさつ運動

年２回，小中共通であいさつ運動週間を設定し，期間内に中学生が小学校に出向いて参加する活動を行うことにより，小中連携してよりよい人間関係形成を図ることができた。

３　研究成果

小中連携のいじめゼロ運動の実践（演劇発表，あいさつ運動，標語やポスター制作・掲示）は，児童生徒への啓発活動としては有効であった。小学校と中学校が同一歩調で進めていることで，中学入学時の不安感も軽減している効果も見られた。また，地域協議会と連携した親学講座においては，地域に小中学校の取組を理解してもらう貴重な機会となり，グループ協議を通して，地域と学校が協働して児童生徒を育成していく意識が高まった。また，専門性の高い講師からの講話を聴くことで理解を深めることができた。

４　今後の課題

小中連携の活動は軌道に乗ってきたが，活動を継続することで更に人権教育を推進していくことが出来ると思われる。演劇発表においては，毎年内容を変えていくことの負担軽減が課題である。

戻る

学校経営研究 〈11〉

研究主題　これからの社会を生き抜くための確かな学力を育む授業力の向上
～ 新学習指導要領の趣旨を踏まえた理数教育における
主体的・対話的で深い学びの創造 ～

学校名　　下野市立南河内第二中学校
校　長　　阿嶋　敬一
代表研究者　校長　阿嶋　敬一

１ 研究目的

新学習指導要領の改訂のポイントとして、学習の基盤となる資質・能力（言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等）や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成を図るためには「主体的・対話的で深い学び」の充実が求められることやカリキュラム・マネジメントの確立などが示された。

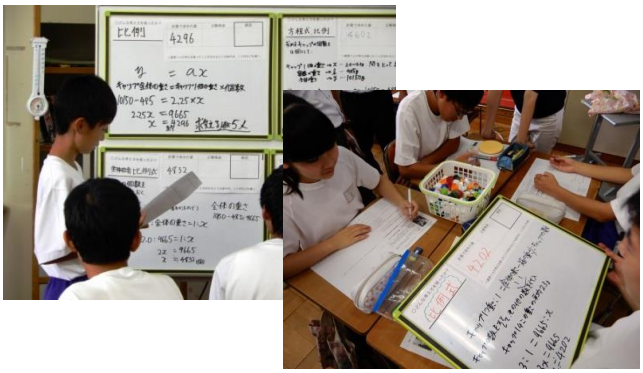
これらのことを推進するために、本校の生徒の学力のプラス面である、理数教育に焦点を当て、数学科・理科・総合的な学習の時間を研究重点教科として位置付け、授業レベルにおいて、これから子どもたちに求められる確かな学力を身に付けさせるために教員の授業力の向上を図る。

２ 研究内容

・研究計画の作成・研究のポイント・目指す生徒像の設定、評価計画・指導計画・学習課題設定についての検討
・とちぎっ子学習状況調査（２年）及び教研式標準学力検査（１年）の分析並びに全国学力・学習状況調査（３年）の分析と改善策
・授業研究会の実施

また、主に以下の３点について、授業研究会や日常の授業の検証をすることで、今後の学習指導の向上に資することを目的とした。

①ねらいの明確化・課題設定の工夫
②深い学びにつながる学習形態や指導方法の工夫
③振り返り（ねらいに対する振り返り・自己評価や相互評価）の研究と実践



（数学科の授業　ボードを活用したチームによる問題解決と解決方法の表現の場面）

３　研究成果

・課題の解決に向け、スモールリーダーを中心にチーム内で互いに協力し、試行錯誤を重ねたり様々な意見を出し合ったりしながら学びを深めることができた。また、思考を促す発問は生徒同士の学び合いを活性化させ、より深い学びへとつなげることができた。
・文章による「振り返り」が定着し、「振り返り」で得られた反省や疑問点をフィードバックし授業改善に役立てたことで、生徒の授業に関する不安や疑問点を解消するとともに教師自身の授業力向上に生かすことができた。

４　今後の課題

深い学びにつなげる資料や教材を収集するには、時間と労力を要する。教員の負担を軽減するため、教員間の情報交換を密にし、かつデジタル教材や資料の共有をより一層進めていく必要がある。

戻る

学校経営研究 〈12〉

研究主題　新学習指導要領、新大学入試制度を見据えた探究活動の充実とデジタルポートフォリオの活用に関する研究

学校名　栃木県立宇都宮女子高等学校

校　長　宇梶　宏美

研究者　教頭　小川　浩昭　・　河原　真則　主幹教諭　滝田　博之　教諭　阿久津　浩

１　研究目的

総合的な学習の時間における探究活動のモデルと活動の記録としてのデジタルポートフォリオを構築し、新学習指導要領及び新大学入試制度への円滑な移行を図る。

２　研究内容

本研究は「平成３３年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告（2017．７発表）」に基づき、現２学年生徒の大学入試に向けて速やかな対応に迫られスタートした。しかし、調査書等の電子化については、文部科学省が 2022 年度に実施される大学入試をめどに、調査書を「全ての大学の全ての入試区分で」電子化することを目指すということを明らかにしたため、基礎研究として以下の三つの内容に取り組んだ。

① 新しい学習指導要領の先行実施を踏まえた総合的な学習の時間の改善

② 新たな調査書における新旧対照表のイメージに基づくデジタルポートフォリオの構築

③ 第１・２学年におけるデジタルポートフォリオの運用準備と基礎データ入力

ただし、上述の文科省の発表を受け、当初構想した学校 HP を活用したデジタルポートフォリオの運用は見合わせている。

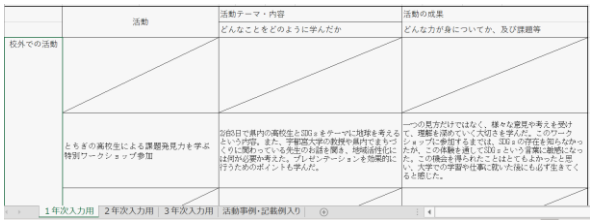
３　研究成果

(1) ポートフォリオの核となる探究活動について、2018 年度は SSH 指定の下、全生徒を対象として基礎的な探究活動を展開し、生徒間での相互評価や教師による生徒一人一人の評価を行った。

写真：探究基礎の発表会の様子
クラス単位で各グループの発表を行い、相互評価を実施した。
観点別、段階評価の方法を検討した。

(2)「高校生活での学習・活動の記録」の作成

文科省（2017．７発表）に基づいて入力フォームを示したが、次の図のように、校外での活動に参加し、主体性を持って多様な人々と協働して学んだ経験などは記載しやすいと言える。



現２学年については、総合的な学習の時間における探究活動のプロセスや成果をデジタルデータとして蓄積させ、２年間の取り組みの振り返りを行うしくみが整いつつある。

４　今後の課題

2019 年度末には、新しい調査書に対応できる見通しが立ち、他校に比べ遅れ気味であったデジタルポートフォリオの活用は大きく前進したといえる。ただし、このような取り組みは、積極的に AO 入試や推薦入試を推奨しているようなメッセージと受け取られる心配があり、e ポートフォリオ等の活用は慎重に検討している。総合的な探究の時間を核として、カリキュラムマネジメントの体制を充実させる必要がある。

戻る

学校経営研究 〈13〉

研究主題　学校の特色づくり（英語力の向上・AL 推進）のための全校体制構築
学校名　　栃木県立鹿沼東高等学校
校　長　　梅　澤　希　人

１ 研究目的

本校では、2014 年度から、校内に学校特色化推進委員会を設置し、学校の特色化と今後の在り方について検討を続けてきた。

同委員会で様々な視点から分析を続けた結果、中学校卒業者数の急激な減少や、普通科高校に対するニーズの多様化、高大接続改革など、本校を取り巻く環境の変化に対応する観点から、「英語力の向上」を本校教育の柱として、学校全体で取り組んでいくこととしてまとめ、2017 年度末、全教職員で共通認識した。さらに昨年度（2018 年度）から、この「英語力の向上」に「主体的に学ぶ生徒の育成（アクティブラーニング（AL）の視点からの授業の研究・推進）」を加えた二つを学校の特色づくりの柱とし、特色化推進に向けた全校体制構築に取り組んでいる。

本事業の研究も、こうした本校の特色化を推進する取組の一つとした。

２ 研究内容

【英語力の向上】英語への興味関心を高める取組や、英語の授業において、配備した機材や教具を活かしながら、アウトプットやコミュニケーションの機会を大幅に増やした。

1)本県県立高校に勤務する ALT を 10 名招聘した英語学習会（イングリッシュキャンプ)開催(夏期休業中の２学年後期課外時)
2)『英語版・バイリンガル版コミック』を多数購入して図書館に配備
3)外国人留学生や海外からの短期訪問学生の受け入れ
4)CD コンポを購入して全 HR 教室に配備し、英語授業を中心に活用
5)英語教育に係る各種研修会への教員派遣

【AL の研究・推進】AL の視点からの授業を推進するために有効な機材や教具を配備するとともに、映像視聴、授業研究会等により教員の AL に対するイメージを拡げる取組

6)有識者（群馬大学　濱田秀行准教授）と地域の中高の先生方を招き、AL の視点からの授業に係る校内研究会開催
7)会議時間を短縮し、毎月の職員会議後、全教員による、AL 推進やカリキュラムマネジメント研究に係るワークショップ開催
8)AL の視点からの授業推進のためのスクールタイマー（大型ストップウォッチ）を購入し、全教室に配備
9)A２判ホワイトボードを多数購入し、AL の視点からの授業実践における効果的な使用方法を研究して活用
10)電子黒板機能付きプロジェクターを各フロアーに配備
11)AL の視点からの校内研究授業・授業研究会を開催（英語・物理）
12)AL の各種研修会・講演会へ教員を派遣
13)AL の視点からの授業改善を中心に据えたカリマネ推進にむけ、「育む資質能力」を明確にしたグランドデザイン作成
14)AL の視点からの授業推進のために生徒向け『授業の７つのルール』策定
15) AL の視点からの授業推進のために生徒向け『キャッチフレーズ』策定
16) AL に係る映像サイト（Find!アクティブラーナー）の全教職員視聴登録更新
17)校内、校外に向けた授業公開週間設定
18)「生徒に時間を返す」方針で、次期学習指導要領の教育課程を編成中

３　研究成果

【英語力の向上】取組により、間違いを怖がらず、臆することなく英語を発することができる生徒が増えてきた。併せて、英語の模擬試験成績も向上してきている。

【AL の研究・推進】授業において、スクールタイマー、ホワイトボード、各種視聴覚機器等の教具がよく活用されている。AL の視点からの授業に積極的に取り組もうとする教員が増え、授業中、より能動的に学ぼうとする生徒の姿が見られるようになってきた。

４　今後の課題

授業スタイルを変えることが生徒の学力に及ぼす影響に対する不安や、新たな教材研究に対する負担感から、AL に踏み込めない教職員も多い。AL の視点からの授業推進による、生徒の主体的な学びの必要性や学力の向上等について、さらに共通理解を図り、学校全体の取組としていきたい。

戻る

学校経営研究〈14〉

研究主題　地域理解学習の充実により地域発展に貢献できる人材の育成を図る

学校名　　栃木県立茂木高等学校

校　長　　大山　優

１　研究目的

小中学校では「とちぎふるさと学習」を受けてきた生徒が、高校生になると地域との接点が希薄となり、自分たちの故郷について知らないまま、進学や就職で都会へ出ていってしまう現状にある。地元の魅力も課題も知らずに出ていく若者たちは、地元に戻る動機が希薄であり、このままいけば、地方から若者がいなくなり、高校そのものの存続も危ぶまれる。

地域は若者との活動を欲している。高校生も地域で学ぶことで成長する。地方創生が叫ばれている今日に必要なのは、主体的に学び、課題発見・課題解決ができる人材であり、このような人材を育むためには、高校生が地域のなかで実践を通して学んでいく必要がある。地域をフィールドとした実践的な授業カリキュラムづくりを進め、地域社会のつくり手の育成を目的とした様々な取り組みを研究したい。

２　研究内容

① インターンシップ・フィールドワーク実施
地域・事業所が一体となって担い手の育成を進めるためのインターンシップやフィールドワークを実施した。地域の人たちとの交流が生まれることで、生徒たちのコミュニケーション能力や社会性が育まれた。

② 棚田の再生活動への参加
NPO 団体の協力を得て、棚田の再生活動等に１年間を通じて参加した。里山のありのままを五感で感じ、そこで暮らす人々の知恵や価値観に触れ、未来の里山を語りあい可能性を発見した。

③ 都市部と農村の交流への参加

園児と一緒に田植え

茂木町中川地区「河又地域協議会」の協力を得て、宇都宮市内「バンビーニゆめ」の園児とその家族を受け入れて田植え、稲刈り、川遊び、山菜取りなどの里山体験を実施した。この活動に参加することによって、農山村の良さ・大切さを理解した。

④ 地域理解講演会の実施
茂木町内の企業より環境・介護等の実践的な講師を招き講演会を実施した。過疎化・高齢社会等の関心を深め、地域課題に対して当事者意識が芽生えた。

⑤ 生徒の地域課題解決学習
インターンシップやフィールドワーク等で訪問した施設の課題を明確にし、解決に向かう提案を研究し発表した。クラス代表グループによるパワーポイントの発表とポスターセッションを行った。

３　研究成果

地域理解学習は地域や保護者の協力・支援が欠かせない。これらの活動は他の活動に比べて連絡調整が非常に煩雑である。しかし、本校は地域連携教員がコーディネート役をすることでスムーズな活動に繋がった。これまで３年間実践し、生徒たちが地域の中で以前より主体的に行動するようになった。また、高校と地域の距離が縮まり笑顔が広がっていると実感している。

教職員も地域と共に学び、「自分たちに何ができ、何をすべきか。」を考え、地域フィールドワークの意味を確認するとともに、より多面的にその意味を捉え始めた。

４　今後の課題

地域理解学習は、生徒が課題を見つけ解決する学習となり、将来に目標を持つことで確かな学力が定着したという成果が見られた。さらに地域連携教員を核とした活動は、参加した生徒が地域に愛着と誇りをもつことにつながっている。今後も継続していくことが重要である。地域と連携した取組も定着し、今後は無理なくすすめていくことが課題である。

戻る

学校経営研究 〈15〉

研究主題　地域の期待に応える魅力と活力ある学校づくり
～グローバル化や急激な社会変化に対応できる
女性リーダー育成のためのキャリア教育～

学校名　栃木県立大田原女子高等学校
校　長　青木　茂実

１ 研究目的

本校では学校の将来構想の中で、県北女子教育の中核校としての地域からの期待や要請を踏まえ、「夢を志に高め　未来を拓く女性を育成する学校」を目指す学校像の柱の一つに位置づけてきた。進学校として、各生徒の第一希望の進路実現を図るため、新学習指導要領の適切な実施と創意工夫ある教育課程の編成に加え、「分かり易い授業」「家庭学習・自主学習につなげる授業」など、質の高い授業の実施を中心とした学力向上に全校で取り組んでいる。また、外部人材を積極的に活用したキャリア教育や体験活動を充実させることにより、 自己と社会に対する理解を深め、進路設計能力の育成を図る。

２ 研究内容

本校では、大学教授による出張講義や社会で活躍するスペシャリストを招聘した講演会、講習会や地域の機関での体験活動を通して生徒のキャリア発達を促す活動を継続的に行ってきた。ただ、外からの刺激や情報の少ない地域であることもあり、生徒の進路意識の向上や知的好奇心の喚起につなげるには限界があった。

本研究では、通常では招聘できない国際舞台で活躍する著名人及び国を代表し世界を舞台に戦っているアスリートを講師として後述のとおり著名人による講演会を実施した。事後の感想文等から生徒の変容を観察し、下記の研究成果を得、研究主題の達成を図った。

著名人による講演会①

講師　宇賀神　直
ジェトロ　貿易投資アドバイザー
元 NEC での主たる役職
本社海外営業本部本部長
本社支配人
ラテンアメリカ社（中南米地域統括会社）社長兼 CEO

演 題 「海の外には広い世界　―海外とのビジネスが教えてくれたこと―」

著名人による講演会②

講師　鹿沼　由理恵
（株式会社ウイッツコミュニティ所属）
パラリンピック・リオデジャネイロ大銀メダリスト自転車競技タンデムクラスの女子タンデム個人ロードタイムトライアル

演題　「人生挑戦」

３　研究成果

社会で活躍する著名人から、経験を踏まえた人生観、価値観等についての講話を聴くことにより、自己の将来を深く考える一助とし、生徒のキャリア発達を促すことにつながった。

４　今後の課題

単年度の研究に留まることなく、本研究主題を継続していく。

戻る

学校経営研究〈16〉

研究主題　自立活動の指導における校内資料「姿勢・動き」のよりよい活用について

学校名　　栃木県立のざわ特別支援学校

校　長　　久保田　幹雄

１　研究の目的

本校は肢体不自由の障害を有する児童・生徒が学ぶ特別支援学校である。子どもたちの障害は多種多様で、配慮事項や指導のポイントなど担当教師が把握すべき情報が多い傾向にある。そのため年度当初の引き継ぎを分かりやすく円滑に行い、自立活動等で使用できる「姿勢・動き」資料を作成している。これは写真を中心とした資料で、本人の良姿勢や動きに関する内容だけでなく、自立活動の課題など、担任が１年間取り組み、次年度に引き継ぎたい内容をまとめたものになっている（写真参照）。

今後も本資料を発展させ児童生徒の成長を促す指導の充実につなげたいと考え、そのよりよい活用について検討し改善点を整理することを本研究の目的とした。

２　研究内容

①「姿勢・動き」資料を導入した経緯や現在までの作成・活用状況の変遷について確認。

②平成 29 年度・令和元年度に実施した「姿勢・動き」資料に関するアンケート分析と課題の整理。

③資料を作成する時の参考資料として過去の「姿勢・動き」資料の見本を提示。

３　研究の成果

・導入したことで、確認するポイントが分かりやすくなり、引き継ぎが年々円滑に行えるようになった。また導入当初は本人の良姿勢や適切な動作についての内容が主だったが、自立活動の指導内容やコミュニケーション面、認知面なども徐々に網羅するようになり、内容が充実してきた。

・ファイルやラミネートにして教室に持ち込み確認しながら授業を進めている事例が増えてきた。また年間を通して付箋でその日の記録を貼り、指導の経過がわかるようにするなど工夫する事例も見られた。

・「姿勢・動き」資料の内容は作成者の自由度が高く、内容を生徒に合わせて作りやすいという反面、慣れない教師にとっては形式が整っている方が作りやすいのではないかという意見が同程度見られた。

・資料の見本を示したことで、作成の時に参考になり、先生方が作成しやすくなった。

４　今後の課題

今後の課題としては資料作成のしやすい形式の検討や項目の整理が挙げられた。運用面ではファイルやラミネートで利便性、携帯性を高め、年間を通した資料の活用の充実が挙げられた。学校全体で話し合いながら、改善に取り組んでいきたい。

「姿勢・動き」資料